



# 「サンヘイ一揆」を知っていますか？

希望学プロジェクト特別寄稿

第8回 中村尚史さん

## サンヘイ一揆？

2006年1月、私は同僚2人（玄田有史氏、宇野重規氏）と、初めて釜石の町を訪問した。私が研究している研究分野は近代日本経済史である。そのため釜石製鐵所および釜石鉱山の歴史は勉強していたし、三陸沖が好漁場であり、またリアス式海岸のため釜石港が天然の良港であることも聞き及んでいた。そして現在の釜石市についても私なりに予習をして、「準備万全」と意気込んで乗り込んだ。ところが市役所の方々に案内していただき、釜石の見所を廻りはじめてほどなく、「ミウラメイスケ」の話題になった。「ミウラメイスケ？誰だそれは？しまった。予習が足りなかった」内心、ドキドキ



三浦命助の碑（栗林町）

ていると、同僚の宇野さんが「サンヘイ一揆の話ですね」と平然と答えた。「サンヘイ一揆？三平さんが起こした一揆かな？」一応、平静を装い、その場を繕っていたが、私の歴史家としてのプライドはズタズタだった。予習不足を後悔しつつ、家に帰って調べてみると、「サンヘイ」は人名ではなく地名の三閉伊（北閉伊郡、東閉伊郡、南閉伊郡の総称）で、三閉伊一揆は弘化4（1847）年と嘉永6（1853）年の二度にわたって、釜石を含む三陸沿岸地域で勃発した大規模な農民一揆であることがわかった。そして「ミウラメイスケ」は、その指導者の一人、栗林村（現釜石市栗林町）の三浦命助（1820—1864年）だった。

## 「小〇」の旗の下で

嘉永6（1853）年5月20日、三陸沿岸の百姓たちは、南部藩の苛政から逃れるため、隣りの仙台藩への越訴（所轄機関の判定を経ずに上級ないし別機関に訴状を提出すること）を企て、野田通田野畑村（現下閉伊郡田野畑村）を出発した。一揆勢は、「小〇」（困窮した隊列を組み、沿道の村々を糾合しながら、宮古通大槌通を一路南下する。そして同年6月5日、一揆勢は大槌通・釜石村に到達、この時点での参加人数は1万6000人を超えていたと言われている。そしてこのうちの8500余人が、翌日、藩境を越えて気仙郡唐丹村（現釜石市



唐丹町）に達し、仙台藩への越訴に成功した。一揆勢は①減税、②専売制度の廃止、③徴税方法の変更といった経済的な要求に加えて、④南部藩の藩政改革、⑤越訴した百姓の救済、⑥三閉伊通の幕領化もしくは仙台領化という政治的な要求をも掲げていた。彼らはこの要求が認められるのであれば南部藩に帰参するが、受け入れられなければ仙台領民になりたいと懇請し、幕府への直訴をも視野に入れて交渉に当たった。一揆勢と仙台藩、南部藩との交渉は、その後、5カ月間にも及んだ。この交渉の過程で大活躍したのが三浦命助である。そして同年10月、命助らは、ほとんどの要求を南部藩に認めさせることに成功し、無事帰国した

（森嘉兵衛『南部藩百姓一揆の研究』法政大学出版局、1974年）。

### 三閉伊一揆の意義

嘉永6年の三閉伊一揆は、江戸時代における最大規模の一揆だった。それは、藩政改革や藩領域の変更、商品生産・流通への規制撤廃という幕藩制の枠組みを超えた要求を掲げ、その要求を貫徹することで旧体制の根幹を揺さぶり、翌年（1854年）のペリー来航とともに、新たな時代を切り開く契機となった。さらにこの一揆は、強力な指導部のもとで整然とした団体行動をとり、二つの藩の対立をうまく利用しながらねばり強く交渉し、直接的な処罰者を一人も出さなかった点でも、画期的な百姓一揆であった。その指導者・三浦命助は、



栗林村肝入の家に生まれ、遠野の寺小屋で教育を受けた後、院内銅山で坑夫を経験し、天保期（1840年前後）には大槌に帰って商人となり、三陸沿岸と内陸部との交易に従事していた人物である。このように彼は、農民の生まれでありながら、鉱業、商業に従事し、大槌、釜石、遠野といった地域を自由に往来することで、地域内外に重層的なネットワークを構築した。こうした外部性をもつリーダー的存在が、幕藩制的な枠組みを超えた政治的・経済的な要求を導き出し、一揆の成功をもたらした。

三閉伊一揆のわずか5年後（1858年）、大島高任の大槌高炉が出銚に成功し、以後釜石周辺では近代製鉄業が急速に勃興する。その背景に、一揆を契機とする封建的諸規

制の解体と身分制度から解放された人々の存在があったのである。

### 団結の記憶

1987年1月、新日鐵釜石製鉄所の高炉休止に反対する市民グループの一団が、「釜鉄の高炉をつぶすな」の横断幕とともに、「小〇」のむしろ旗を押し立てて、新日鐵本社への陳情を行った。このように三閉伊一揆における団結の記憶は、時として釜石のみならず、大槌や山田、宮古を含めた三陸沿岸地方における「民」の記憶として甦る。「鉄と魚の町」釜石には、もう一つ、重要な記憶の源流があるといえよう。「小〇」の旗印に込められた団結の記憶は、釜石における今後の地域再生を、その根底の部分で支え続けるに違いない。



#### Profile なかむら・なおふみ

1966年生まれ。東京大学社会科学研究所准教授。専攻は日本経済史・経営史。主著『日本鉄道業の形成』日本経済評論社、1998年。